2021年(令和3年)9月15日(水曜日)　夕刊　讀賣

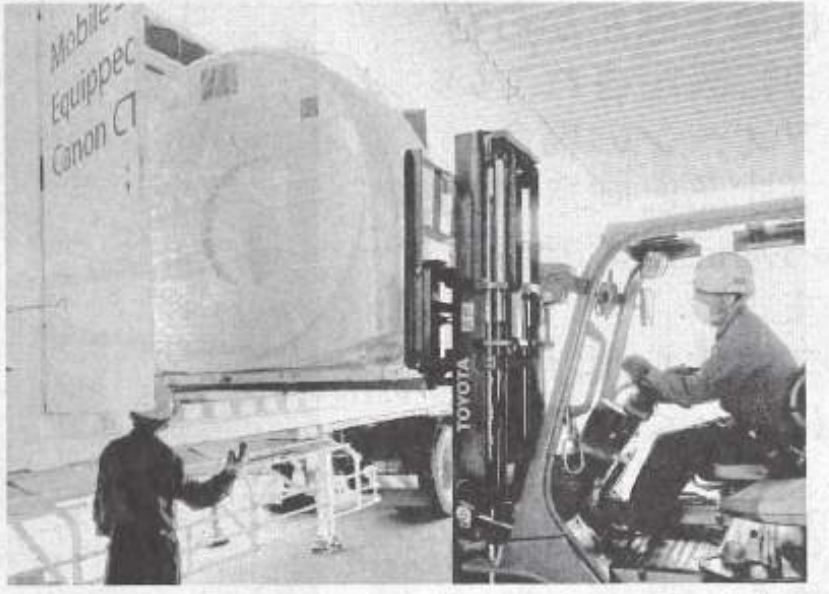
コロナ診療に コンテナCT

肺炎などの診断に使うコンピューター断層撮影装置（CT）をコンテナに積んだ移動式CTが、新型コロナウイルスの医療現場で使われ始めた。トレーラーで自由に運んで駐車場などに設置できるため、仮設の医療施設としても活躍が期待できそうだ。

「コンテナCT」は、医療機器メーカー「キヤノンメディカルシステムズ」（栃木県大田原市）が、感染症に対応するために開発。全長12㍍のコンテナに、大きなドーナツ形のCT装置が据え付けられている。18日からは、更新作業でCT装置が使えない「戸塚共立第2病院」（横浜市）に貸し出し、駐車場の一角に設置する予定だ。

同病院の担当者は「新型コロナ患者の肺炎の確認にはCTが欠かせない。診療を止めるわけにはいかず、貸し出しはとてもありがたい」と話す。

通常、CT装置は病院内の一室に設置されるが、コロナ診療では感染者と非感染者の動線を分ける必要があるなど、制約が大きい。同社によると、コンテナCTを駐車場などに設置すれば、一般の患者と接触せずに、新型コロナ患者を効率的に検査できるという。



コンテナに搬入される大きなドーナツ形のCTの装置（栃木県大田原市の「キヤノンメディカルシステムズ」で）＝菅野靖撮影